

2026年度共通テスト『情報Ⅰ』の概観 ～共通テスト導入2年目のオプティマイズ～

愛知県立高蔵寺高等学校 教諭
田中 健

1. はじめに

「なんぼなんでも共通テスト、ノー勉で迎えるっちゅうんやったらえらい目に遭うで！」こんな意図を十二分に孕んだ方針転換の跡が、2026年度、2年目の共通テスト『情報Ⅰ』に見られた。共通テスト『情報Ⅰ』では「日々の授業内で培われた知識の質が問われ」るべき、と主張したのが昨年度iNetの拙著¹⁾。2026年度の本試験では20点程度、教科「情報」に深く関わりのある知識をもとに日常生活に照らし合わせた解答が求められたのは、大きな転換点といえる。

灰聞^{そくぶん}するところでは、2025年度の初回出題内容に^{かま}感^かけ、3年生に対して『情報Ⅰ』の対策は特にしない、生徒任せにしている、という先生もいたとか。本稿が紙面となって各校に届く頃には、この出版元からも内容を一段と手厚くするマイナーチェンジが施された教科書が供給されることになっている。これは、とりもなおさず、今後共通テストの解答にあたって要求される教科「情報」の知識の幅が広がるということ（もちろん点数を取るための学習であってはならないが）。教科「情報」の授業を片手間で済ますことが全国的に許されなくなる——そんな喜ばしい副産物を2026年度の共通テスト『情報Ⅰ』がもたらした、というのは言い過ぎだろうか。

2. 2026年度の受験データと出題内容

さて、言及する対象を2026年1月18日実施分『情報Ⅰ』の本試験問題とした受験統計²⁾は次のとおりである。

〔試験時間・配点〕60分・100点満点

〔平均点〕56.59点 〔受験者数〕305,202人

教科「情報」の知識が明確に問われたことが影響したのか、平均点は昨年度の69.26点よりも大幅に下回り、相対的に難化した。また、受験者数に目を向ければ、全体の受験者数464,090人に対する『情報Ⅰ』

の受験率は約66%と、昨年度より約6%増えている。これは、受験が必須である国公立大学志望者のみならず、共通テスト利用入試が導入されている私立大学志望者の受験が増えたためと推測される。たった6%と見た目上のインパクトは薄い³⁾が、この上がり幅は特筆すべき数値であり、共通テストに教科「情報」が馴染みはじめたという証左になろう。

出題内容に関しては、前述のとおり、知識を前提とした設問が大幅に増えたことが特徴的である。出題分野は、今年度も次のように学習指導要領に掲載されている単元全4編から採用されており、日常生活に根差した情報の活用を問われるものが多かった。〔設問数〕大問4問、マーク数60個

<第1問>

- 1 記憶装置と情報セキュリティ(コンピュータのしくみ・情報セキュリティ)
- 2 16進法への基数変換(情報のデジタル化)
- 3 スクロールボタンのUI設計(情報デザイン・代表値)
- 4 電子メールのしくみ(ネットワーク)

<第2問>

- A 住民情報を交換するためのシステム構築(情報システム・情報セキュリティ)
- B ビット演算による画像合成(情報のデジタル化・論理演算)

<第3問>

待ち時間のシミュレーションを行うプログラムとそのチューニング(モデル化とシミュレーション・アルゴリズム・プログラミング)

<第4問>

オープンデータを利用した桜の開花日の推定(データの活用・問題解決)

主記憶装置と補助記憶装置の違い・情報セキュリティの考え方などが出題された第1問は、知識を前

提としていることが明確な特徴。解答欄がfまで増えたことによる16進法の出題は想定どおり、メール送受信のしくみが問われたのはSNS全盛の現代の高校生にはエアポケットだったかもしれない。

第2問Aでは、役所へ提出する個人情報の安全なやりとりとその経路をデフォルメした日常生活に絡めた情報システム、戸惑った受験生が多かったとされる第2問Bでは、二値画像の処理にビット演算を組み合わせた結果が問われた。

第3問のゲーム体験の待ち時間についてのシミュレーションに関する「プログラミング」、第4問の桜の開花日に関する「データの活用」については、昨年度と同様の傾向で解答しやすかったと考えられる。

全体として、問題冊子のページ数が増えたこと、解答に至る道筋が問題文中に明示されなくなったことで、問題設計上の難易度が上がったのは間違いない。ただ、しっかりと学習をしていれば、問題文中のヒントを拾えるよう配慮されているともいえる。

3. 日常に即した想像力がカギを握る出題

とりわけ、ある程度の知識と問題文中に配されたフックをもとに場面を掘り下げていくという、いかにも共通テストらしい考え方が求められたのが中間構成の第2問Aと第2問Bであろう。配点は各15点ながら、ともに6ページに増量されており、その点からも作問者の意気込みが窺える。

第2問Aで設定されている場面は、住民票に相当する個人情報を紙媒体でやりとりしているアナログな現行システムを、いかにしてセキュリティ強度を保ちながら電子システムに移行するか、という情報システムのコンセプトについて、適切なデータフローと条件を考えさせるものである。特筆すべきは、どのようなデータが両者間で送受信されるか、だけではなく、矛盾が起きぬよう順を追ってその過程を辿るところにあり、情報システム構築経験のない一般的な高校生にとっては、現実社会を土台にした高度な想像力が要求された。他方、状況設定は完璧とはいえないのが惜しく、この分野に明るい者にこそ優しくないトラップも散見された。フロー中に必ず存在するはずのユーザIDが登場しない(文中にしれっと断りはあるが)こと、電子システムを構築する流れにも拘らず最終局面で紙媒体が復活していることなど、解答中に思わずツッコミが入って思考を阻害さ

れたのは筆者だけではない筈である。

第2問Bについては、抽象的なOR/AND演算の概念を、実際に重ね合わせる色に即して変換するという、更に高度な想像力が要求された。論理演算に合わせて0&0のみ黒、1&1のみ白と断片的には食らいつくも、最終的には「バボ……クマ……」と放心状態に陥り、問2でドロップアウトした受験生も少なくなかったようである。何よりも興味深いのは、大多数の高校生は件の画像処理(例:ネット上に転がっている筆者の写真データの顔以外を透過させ、グラビアアイドルの水着写真データの首から上をそれに挿げ替え、クラスのLINEグループのアイコンにする)をスマートフォン上で難なくやっつけのけるというところにある。「高校生の日常の一端を情報科学の見地からじっくりと眺めるところなる。どうだ、教科「情報」って面白いだろう?」と、獅子の子落としさながらのメッセージを、大学入試センターはこの出題に盛り込んだ気がしてならない。

4. 来年度の試験に向けて

2026年度の出題に鑑みれば、いわゆる「ノー勉」でも高得点を期待できた初回実施分の反省を活かしたオプティマイズ(最適化)の年と見る。また今後も、日々の授業で培われた知識を最大限に活用できるよう、年々微調整がかけられていくと推測される。もちろん、それは解答に必要となる知識の範囲を無尽蔵に広げ、テストを難化させるという目的ではなく。

現代社会に張り巡らされた情報網は、どのような条件のもとに成り立ち、稼働しているのか。今まさにスマートフォンの画面上で処理されている内容を、情報科学の視点で捉えたと、どのように表現されるのか。今しがたネットニュースになったゴシップは、真正なのか、どのようにそれを検証することができるのか。確かな知識の入り口になる「なぜ?」を授業内で考えさせるネタは数限りなく存在する。

いよいよ、本物の情報の先生が活躍するフェイズの到来だ。

参考文献

- 1) 田中健, 「2025年度共通テスト『情報I』の概観 ~大学入試センターへの忠言を添えて~」(2025年5月) <https://www.chart.co.jp/subject/joho/inet/inet71/inet71-1.pdf>
- 2) 大学入試センター, 「令和8年度大学入学共通テスト実施結果の概要」(2026年2月5日公開) <https://www.dnc.ac.jp/news/albums/abm.php?d=514&f=abm00006109.pdf>